



橋本青江 (1828 - ?) 《松溪養鶴圖》明治13年 (1880)

## 橋本青江の画業について初探

### はじめに

橋本青江は、幕末から近代を生きた女性文人画家である。多くの女性画家と同様、いやそれ以上に、その生涯について不明の点が多い。青江については、弟子の河邊青蘭が書いた3編の記事が基本的な資料となっている<sup>1</sup>。青江に関する先行研究としては、当館館報7号(2010年)に掲載された山盛弥生の当館所蔵「山水図」の解説がほぼ唯一のまとまったものであり、そこで、一般に通行している1821年生まれという説は、1828年生まれと訂正すべきことが示された<sup>2</sup>。また、出身地についても、青蘭が「播磨出身と思っていたが大坂船場の相当な資産家の出身と後に人に聞いた」ということ<sup>3</sup>や、他の資料からもその地と縁が深いことを示し、播磨を出身地の候補として考慮すべき余地もあると述べる。ただ、青江は、落款にしばしば「浪華青江」と記していることや、自らの強い希望で最期は大阪に移って亡くなったことから<sup>4</sup>、大坂人という意識を持っていたことは確かであろう。実は、青江の画の師であった岡田半江も、播磨との縁が深いのだが、そのことも何らかの関係があるかもしれない。また、本稿で後に示すように、岡山県児島の塩業家野崎家に逗留して息女に絵を教授していたことも新たに分かっている。少なくとも、播磨(兵庫県)や備前(岡山県)地域と大坂の文化的なつながりの強さを、その背景に想定することができよう。

なお、青江の夫という画家橋本芳谷については、手がかりとなる資料も作品も目下未見である。それに関しても山盛氏が、1853年の「古今南畫要覽」(水流山房蔵版)の閨秀の項に橋本青江とあることから、26歳のころにはすでに芳谷と結婚していたと指摘する<sup>5</sup>。江戸時代末期に、夫の姓を名乗ることが一般的であったのか、筆者は現在判断する材料を持たないが、いずれにせよ、橋本青江の生家や結婚前の姓も不明とせざるを得ない。そんななか、青江の訃報に接した青蘭が、弔問しようと大阪の陋屋が並ぶ路地で探しあぐねているとき、「大橋」の家を訪ねるのかと問われ、そうだと答え「大橋なら手前」と言われたと記していることが注目される<sup>6</sup>。二度も繰り返し記された「大橋」という姓は「橋本」の単なる誤植と言い切れず、今後、一考する価値があるかもしれない。

江戸時代から明治へという激動の時代を生き、東の奥原晴湖と並び称された橋本青江だが、晩年には忘れられた存在であったことを青蘭は繰り返し嘆いている。奥原晴湖に比べても現在その知名度は極端に低く、作品もほとんど知られていない。江戸時代にその前半生を生き、明治時代に後半生を生きて「その名四方に聞ゆ」(『大日本人名辞書』)<sup>7</sup>と称された青江は、女性画家研究の対象として、また、近世から近代にかけての日本における中国明清文人画の受容を具体的に考える上でも、興味深い重要な存在であると考えられる。

本稿では、まず、現段階でカラー画像を入手できた紀年作品を取り上げ、青江の生涯と画風の変遷の輪郭の把握を試み、今後の橋本青江研究の初探とすることとしたい<sup>8</sup>。

### 青江の生没年などについて補遺

先に述べたように、青江の生年の訂正の根拠の一つが、当館蔵「山水図」の款記、「庚辰(1900)春至、…七十三 青江橋瑩」である。前提として、この作品が真跡である(或いは少なくとも真跡の忠実なコピーである)ことが必要であるが、後に見るように、この作品は青江の他の作品のなかに矛盾なく位置づけることができた。また、本図だけでなく、今回取り上げた他の作例からも1828年生まれであることが証左される。

さらに、補足すれば、青江の娘の總子、号青蘋の生年は慶応3年(1867)とわかっている。実子であれば、旧説では青江47歳の時の子ということになり、考えにくい。新説によれば、青江数え40歳の時の子となり、不可能ではない。青江には子息もいたが<sup>9</sup>、青蘋が養女であった可能性も考えられる。すでに知られているように、青江は娘青蘋とともに1890年4月に上野で開催された第3回内国勸業博覧会に出品している<sup>10</sup>。新説に従えば、青江63歳、青蘋24歳の年に当たり、これも旧説の70歳より考えやすい。娘である画家青蘋のその後については、青蘭が手記のなかで、京都に住んでいるが今は何をしているか不明と述べているように、画家としての活動はほとんど知られていない<sup>11</sup>。ちなみに、青江の弟子であった河邊青蘭は、青蘋より一ツ年下の明治元年(1868)生まれであった。青江の自宅に通って画を学んでいたという青蘭の手記には、同年代の当時の師の娘のことについては、何ら触れられていない。

## 岡田半江への師事の時期について

さて、この1828年生まれで1905年頃亡くなったという青江の訂正された生没年によって、青江がどの時期に、岡田半江に画を学び、儒者篠崎小竹に書を学んだのかについて、少し考えてみたい。

岡田半江は、天明2年(1782)の生まれで弘化3年(1846)2月8日に65歳で亡くなった。また、儒者篠崎小竹(天保元年1781-嘉永4年1851)は、半江と幼なじみの友人であり、岡田半江より1歳年上で、半江の没後5年後に没している。

青江の事例で分かるように、子女の習い事あるいは基本的な教育そのものとして、書や詩文を伴う文人画を学ぶこと自体、幕末期の大坂の文化的環境をよく物語るといえるだろう。と同時に、青江の生まれが播磨であったとしても、大坂船場のそれなりの資産家の娘として育ったであろうことは、この一事を見ても間違いのないように思われる。後、同じく大坂の富裕な家の娘であった河邊青蘭も、漢詩文を学び、また10代半ばから20歳頃まで、青江について南画を学ぶことになる。他にも、当時の大坂では、跡見花蹊(1840-1926)や波多野華涯(1863-1944)などの女性たちが、幼い頃から南画や漢詩文を学び、後に文人画家としても活躍している。それらは、幕末から明治にかけて、大坂の商家の文化環境のなかで、女子教育においても文人画や漢詩文などの中国の文人文化が、重要な地位を占めていたことを示す事例といえるだろう。

さて、青江が文人画を学んだ岡田半江は、父の米山人(1744-1820)を継いで、大坂の米穀商として、津の藤堂藩の大坂屋敷に仕えたが、天保3年(1832)には隠居し、天満橋あたりに別宅を構え隠居生活に入ったといわれる。その後、天保8年(1837)に友人だった大塩平八郎が義憤から挙兵し、その際の戦火で大坂は焦土と化し、半江の別宅も全焼して、書籍や書画骨董をすべて失ったことが知られている。そののち、半江は住吉浜(現在の大阪市住吉区)に移り住み<sup>12</sup>、画業に集中し、そこで多くの優れた作品を描いたといわれている。1837年の大塩平八郎の乱のとき青江はまだ10歳であった。青江が半江に就いて文人画を学んだのは、年代的にみれば住吉浜に移ってからと考えられる。ただ、船場から住吉までの十数キロの道のりを青江が通ったとは少し考え難い。家督を譲ったとはいえ岡田家の本宅はまだ大坂市内にあったはずなので、半江が大坂市内に出てきたときに学んだと考えるのが自然と思われる。或いは、半江が住吉浜に移居する以前の10歳以前にもすでに、半江に南画を、篠崎小竹に書を学びはじめていたという可能性も考えられる。だが、半江から「江」の字をもらい青江と号していることや、青江が半江の五十年祭(或いは百年祭)を営もうとしたと河邊青蘭が述べていること<sup>13</sup>からも、少なくとも画風の継承が可能な時期まで学んでいたと考える方が自然である。

半江は弘化3年(1846)2月8日に65歳で亡くなるが、その時、青江は数えて19歳になったばかりであった。その後、青江がどのように画業を続け、維新から明治へという社会の大きな変動のなかで、画家としての地位を確立していったのかは不明である。現在分かっているのは、橋本芳谷と26歳までには結婚し、慶応3年(1867)、40歳の時に娘青蘋が生まれたことである。河邊青蘭が青江に師事したのは、15歳から19、20歳まで、つまり1882年から1887年頃であり、その頃の青江はすでに50代、画家として最も充実した活動をしていたと考えられる。青蘭は、青江の性格や文人氣質について述べているが、当時の師の家族については何も触れていない。

そして、明治23年(1890)4月、63歳の青江は、24歳の娘青蘋と、上野で開かれた第3回内国勸業博覧会に出品している。すでに青江のもとを離れた青蘭も、そこに出品していた。ただ、その頃、夫橋本芳谷の消息は全く見えてこない。青江が本格的に画業に注力したのも、何らかの事情によって、自身が本格的に画で身を立てる必要があったのかも知れない。明末の女性画家文俶(1595-1634)の例<sup>14</sup>を挙げるまでもなく、伝統社会で女性の社会活動を促したのは、何らかの「不幸」であったことは一般的であったと思われる。ただ、青江はそんななかでも、商売として画を売ることが潔よしとせず、文人氣質を貫き、晩年には特に落魄した暮らしぶりであったという<sup>15</sup>。

## 青江と岡山野崎家

河邊青蘭が青江に師事していた時期、青江は、岡山県児島(現在倉敷市)で製塩業を営む大資産家の、野崎家と親しく交流している。明治15年(1882)11月1日、青江は門人や野崎家の理事や関係者とともに、野崎家の遠勢楼を訪れている<sup>16</sup>。当時野崎家に逗留していた来船清人の衛鏗生を訪ねるためであった。翌々日の11月3日には野崎家表座敷で酒宴がもうけられ、4日には別れの宴が催されたという。また、青江は野崎家に逗留し、当主野崎武吉郎の娘於達、号柳江に画を教えている。1888年に青江が墨竹と岩を、柳江が薔薇を描い

た「長春竹石図」（暖簾）が、近年野崎家で発見され、2021年に岡田半江の作品などとともに旧野崎家住宅（野崎家塩業歴史館）で展示された。その展示風景を紹介する岡山の放送局のネットニュースの画像に、岡田半江の米法山水図の隣に、青江の米法山水図が映っている<sup>17</sup>。その画像からは青江の米法山水図の年記を確認することはできなかったものの、手前に松樹を大きく描き、後方に二峰を聳えさせた長条幅で、長文の自題が見え、典型的な青江の山水構図を見せている。野崎家には、他にも青江画が多数所蔵されていると思われる。今後、調査の実現を期したい。

さて、青江の弟子の河邊青蘭が、青江に学んでいたのは、まさに、青江が野崎家に衛鑄生を訪れた1822年から、野崎家に逗留し娘の柳江と合作をした1888年頃までの時期にあたる。野崎家の当主武吉郎（1848-1925）は、代々の富裕な大地主で塩業家であり、清国やロシアとの文化的交流にも貢献し文化事業や社会事業にも尽力したという。1890年から1906年まで、高額納税者として推薦され貴族院議員になった。また、青江と一緒に野崎家を訪れた田辺為三郎（1864-1931）は、野崎家筆頭理事で、碧堂の名で山水画をよくし漢詩集も出版した文人であり、1898-1902年には衆議院議員となり、のち日本汽船を創業した実業家でもあったという<sup>18</sup>。当時の青江が、野崎氏やその周辺の有力者に、文人画家として遇され、交流していたことがわかる。ただ、そこに、夫芳谷の姿はなく、少なくとも当時の青江の活動は、彼女自身が築き上げたものと推測される。河邊青蘭は、自身が学んでいた時期、すなわちその頃が青江の全盛であろうと述べている<sup>19</sup>。

ちなみに、江戸時代には、女性文人画家たちの多くは、文人の妻や娘や妹であり、家に画をよくする男性文人の存在により活動が牽引されている例がほとんどであった。一方、明治時代になって活躍した女性南画家は、西の青江、東の晴湖と並び称された奥原晴湖や、特に次世代の西の河邊青蘭、東の野口小蘋など、いずれも夫や父など、家族のなかの男性画家による「家学」としての作画ではなく、自身で画技を身につけ、何らかの経済的な理由などが契機となったとしても、その後自身の才覚によって画家として立ち、活動する者が目立つようになる。中国でも明末から清朝になると、女性文人たちが、自身の意思で活動し、文集を出版する者も増えているが、それと同様の変化が、幕末と明治の間には起こったと見ることもできるかもしれない。そのような変化を準備したのは、幕末の文化的状況であったが、その本格的な表れには、明治という新しい時代が必要だったというべきかもしれない。

## 青江の事績と紀年作品による略年表

以上の青江に係わる事績を簡単にまとめ、次のように便宜上西暦を先に示し、略年譜を作成した。さらに、本論で取り上げる年記のある青江作品を時代順に数字を付して示す。（なお年齢はすべて数え年）

1782年（天明2年）岡田半江生まれる。

1828年（文政11年）橋本青江生まれる。

1832年（天保3年）岡田半江の友人、頼山陽没。半江らに衝撃を与える。

岡田半江隠居 天満橋付近の別宅で田能村竹田ら文人と交流続く。

1837年（天保8年）大塩平八郎の挙兵。半江の別宅焼失。

1838年（天保9年）半江、喪失から立ち直り、創作に没頭し始める。この年以後、住吉浜に移住。

1840年（天保11年）この頃、橋本青江、岡田半江に師事か。

1846年（弘化3年）2月半江没（享年65）。青江19歳。

1853年（嘉永6年）この年以前に橋本芳谷と結婚。

1867年（慶応3年）娘聡子生まれる（青江40歳）。

①1876年（明治9年）2月「秋江垂釣図」紙本墨画着色、所在不明（オークションサイト）。

②1880年（明治13年）9月9日「松溪養鶴図」紙本墨画淡彩、当館蔵。梅臯翁の古稀を祝うための作品。

1882年（明治15年）11月1日 岡山野崎家に来舶清人衛鑄生を訪ねる。

1882～87年頃（明治15～20年）：この頃、河邊青蘭、青江に師事。青江55-60歳。

1888年（明治21年）岡山、野崎家に逗留し武吉郎の娘於達を指導し、合作暖簾を制作。

1890年（明治23年）4月上野の第3回内国勸業博覧会に娘青蘋とともに出品（着色風景人物画）。

③1890年（明治23年）秋「山水図」紙本墨画淡彩、吉川氏の依頼（Eミュージアム大阪HP）。

④1893年（明治26年）梅雨月「青緑山水図」絹本着色、観蘭楼にて写す（同上HP）。

- ⑤1895年(明治28年)「岡陵松陰図」紙本墨画淡彩、所在不明 Wikipedia所載。  
 ⑥1900年(明治33年)庚子七三姫「山水図」紙本墨画淡彩 当館蔵 原氏の依頼による作品。  
 ⑦参考：1901年(明治34年)辛丑七四姫「雪景山水図」紙本墨画 個人蔵(山盛論文挿図)  
 1905年頃(明治38年)青江没(享年78歳)。

## 青江の作品について

上に示した、管見に入った年記のある青江作品について、以下年代順に述べる。

### ①「秋江垂釣図」紙本墨画淡彩 145×41cm 丙子(1876)年 オークションサイト所載作品<sup>20</sup>

自題・款記：柿葉霜黄秋滿壑、芙蓉波冷月臨川。丙子(1876)梅正月写 青江。  
 印章：「喬瑩之印」(白文方印)「青江」(朱文方印)。関防印の印文は画像からは不詳。  
 河邊青蘭の箱書きがある。

自題から1876年の作、青江49歳の作とわかる。題詩は、南宋の余復(1190年の進士)の「題燕文貴秋山蕭寺図」の七言律詩の第3、4句を採録したもの<sup>21</sup>。自題の書と画ともに筆致が伸びやかで、墨の発色も美しい魅力的な作品である。長条幅に、前景に樹叢、片側(ここでは左)に主峰を寄せて聳えさせる構図は、師の岡田半江も常用したもので、青江もその型に従っている。この作品では、前景と中景の樹叢の間を広くとり、主峰を左端に片寄せて遠く小さめに、また、右方の遠山も低く抑え、全体に皴が少なく淡墨を使った画法である。そのため、後の作品のような山塊の強調や複雑な構成はなく、奥へ続く水面がゆったりと穏やかに広がり、長閑な印象を与える。前景の釣り人を囲む樹叢や、中景の木々に囲まれた村落が、やや大きめに描かれ、その筆遣いのリズムが心地よく伝わる。題詩では柿の黄葉を詠むが、柿の実のように枝先に点じられた朱点が、画面に明るさを与える。このようにわずかに点じた色彩の効果的な用法は、その後の作品にも見られる青江画の特徴である。青江の筆墨の魅力がよく伝わる作品で、青蘭の箱書きにも「天趣の妙を得て、妾もその掣みに倣うといえども能わず」とその筆墨を賞賛する<sup>22</sup>。

### ②「松溪養鶴図」紙本墨画淡彩 123.6×39.8cm 庚辰(1880)年 当館蔵

自題・款記：松溪養鶴。庚辰重陽日、敬写奉賀、梅皋老公古稀榮寿。即希政之。  
 印章：「喬瑩私印」(白文方印)「青江」(朱文方印) 遊印「山静似太古」(白文長方印)

梅皋という号の人物の古稀を祝って贈った作品とわかる。この人物は未詳。題記の書体は、本稿で取り上げる他の作品とは違って、丸みを帯びた楷書風であるが、最初の一文字の墨をたっぷりつけ、線の肥瘦や墨継ぎなどの書きぶりは他の作品の書と共通して自然である。また、「梅」の傍の下の横画を閉じない独特な字体は、④の款記にある梅雨の「梅」の字の傍と非常に近く、同一の手であることを示している。

青江が好んで用いた紙本に描かれた、比較的小幅の米法山水画である。米法山水は、師の岡田半江も得意としていた画法と思われ、先に触れた野崎家の展示で、半江の「米法山水図」の隣に展示されていた青江の米法山水の構図も基本的に本図に共通する。そちらは高く聳える峰の高さが強調され、麓の松樹は数が多く、杖をつき小橋を渡る高士一人が描かれている。この作品は小品ゆえに、松の葉叢や米法山水の米点の筆数も控えられ、肩肘張らない趣がある。だが、モチーフはかえって豊富で、楼閣やそれに向かって、松の下を歩む高士の後ろには、靈芝を入れた籠を持つ童僕が従い、さらに、彼らを先導するように小橋を渡る小さな鶴の姿があり愛らしい。鶴は文人の友であり、同時に長寿の象徴でもある。画中の長松と靈芝も長生の象徴である。そして、鶴の丹頂と靈芝に点じられた臙脂の赤や、山石や建物の一部にごく淡く差された代赭も、墨画に控えめに華やぎを添えている。

ちなみに、右下の遊印の印文「山静似太古」は、北宋末の唐庚(1070-1120)の詩「醉夢」中の詩句で、沈周「策杖図」(国立故宮博物院(台北))の題詩にもこの詩句が用いられ、文徵明もこの対句を画題に用いるなど、中国の文人たちに非常に好まれた詩句である。

### ③「山水図」紙本墨画淡彩 138.0×42.6cm 庚寅(1890)年 Eミュージアム大阪<sup>23</sup>

自題・款記：看雲疑是青山動、誰道雲忙山自閑、我看雲山亦忘我、問來洗硯写雲山。  
 庚寅(1890)秋社日前二日、写為吉川賢契之高囑浪華青江瑩。

印章：「喬瑩」（白文方印）「青江」（朱文方印） 関防印あり印文未詳

庚寅の年、「秋社日」は秋分の日後の五回目の戌の日、その二日前に、吉川氏（賢契は賢弟と同義。年下の男性への敬称）の依頼により描いたもの。少し癖の強い行書で、七言詩を書す。この詩は、明の沈周（1427-1509）が自らの「雲山図」に題した詩で、著録類に採録されている<sup>24</sup>。大意は、「雲を見ていると遠い山が動いているのではないかと思う。誰が雲は忙しく山は静かであると言ったのだろう。私は雲山を見るとしばし我を忘れ、そののち硯を洗って雲山を描く」。①と同様、明末清初の著録に載る題画詩を採録している。

画幅は、②の「松溪養鶴図」より一回り大きな続本画である。画中の景は①や②よりも複雑に構成され、ジグザグに奥へと視線を誘い、広く遠い景をとらえている。雲に包まれた湿潤な山景を描き、米法山水風ではあるが、点描で山容を形作る米法山水とは異なり、皴や卵石など董源巨然系の画法を米法山水に融合させた元の高克恭（1240-1310）の系譜に属する画法といえる。②の作品と同様に、峰や岩の一部や建物や橋などに淡い代赭を差し、さらに建物の屋根や人物の衣に青を使って、墨画に彩りを添えるとともに、卵石や樹の葉叢などにひときわ濃い墨色を用いてアクセントとすることで、近景から遠景へと連続して遠ざかる空間をバランスよく表出している。

#### ④「梅林春景図」絹本着色 134.4×50.4cm 癸巳（1893）年 Eミュージアム大阪<sup>25</sup>

自題・款記（HP掲載の画像部分図から判読）

村西行楽到邨東、沙路溪流曲折通、莫問梅花開早晚、杖藜向処即春風。

癸巳梅雨月写於觀蘭樓、浪華青江。

印章：「喬瑩私印」（白文方印）「青江」（朱文方印）、関防印あり印文未詳。

題詩は、宋の陸游の詩「村東」である<sup>26</sup>。「村の西から出かけて村の東に着いた、水辺の道と溪流が折り曲がりながら通じている。梅の花がもう咲いているかどうか聞かなくても、杖をついて出かければ、至る所春風が吹いている」

③よりも横幅がある画面に、詩にいう「沙路溪流曲折通」を文字通り表すように、自然の地形ではあり得ない複雑な景が作られている。尾根の道が、斜めに折れ曲がって、画面をいくつか区切っている。左下に船着き場があり舟を降りる人物が見え、斜めに画面を横切る尾根道を行く高士と従者の童僕がおり、その先の書屋に主人の姿が見える。尾根道の右奥に水面が遠ざかり、水辺には梅の木に囲まれた屋敷が見える。左端の書屋の後ろから峰が右斜め上に伸び上がり、その奥左には主峰が聳え、そのあたりから滝が流れ落ちる。過剰な景物を複雑に組み込んだ画面構成であるが、筆数を抑えた透明感のある緑青と代赭の彩色によって、画面に明るい統一感が生まれている。そこに、高士の衣に点じられた濃い朱色や、建物の壁や屋根に青や代赭が彩りを添えるのは、他の青江画に共通する。青江が精緻な青緑山水を描こうとせず、伝統的な文人画にこだわったため、時流に合わなかったと、河邊青蘭が述べている<sup>27</sup>が、青江も青緑山水の大作を描いていたことが分かる作品である。ただ、それは、青蘭や野口小蘋が描いたすっきりした近代的な青緑山水とは違って、高克恭の「横雲秀嶺図」（国立故宫博物院（台北））のような皴や卵石を併用した、中国の文人画の伝統に基づく青緑山水画と考えられる。また、ここに見られる複雑な構図や卵石を多用する傾向は、後の⑥にも認められ、青江晩年の大幅の山水図に共通する特徴といえるかもしれない。

#### ⑤「岡陵松福図」墨画淡彩 寸法不詳 乙未（1895）年 所蔵不詳 Wikipedia橋本青江の項に掲載<sup>28</sup>。

自題・款記（画像から判読可能な文字のみ記す）：岡陵松福図。乙未□□写□、六十八嫗青江瑩。

印章は判読できず。

明治28年（1895）数え年68歳の時の作。この自識からも、青江の生年を1828年と訂正すべきことが分かる。くねった二本の松が高く伸びて、左に高く聳える峰から滝が流れ落ちている。松の下には、滝を望むように、二人の高士が対座し歓談し、その傍らで童僕が茶を煮ている。画面が比較的小さいためか、③④のような複雑な構図ではなく、卵石も目立たず、また奥行きへの指向もあまり見られない。①の峰と②の前景を合わせたような構成である。ここでも、松葉の緑や高士の衣などに差された代赭が効果的で、岩の輪郭を強調する点苔の濃い墨色が画面を引き締めている。

⑥「山水図」絛本墨画淡彩 130.9×49.7cm 庚子(1900)年 当館蔵

自題：萬々季山色、千々歳水声、梅花与松竹、鶴算入仙盟。

庚子(1900)春至日(春分の日)、写為原雅君之高嘱、七十三嫗青江橋瑩。

印章：「喬瑩私印」(白文方印)「青江」(朱文方印)

関防印「無法不可」(白文長方印)「寿考萬年」(白文方印)

④とほぼ同じ大きさで、青江画として大幅である。明治33年(1900)青江73歳、晩年の作である。この画を依頼した原氏については不詳。「忘れられ」「寂しい晩年」と青蘭がいう青江の晩年にも、依頼を受けこのような大幅の制作を行っていたことが分かる。「万年も変わらない山の色、千年も流れ続ける溪流の音色、梅と松と竹とともに鶴も仙界の盟友に加わる」と長寿の祝意を示す題詩は、中国詩に典拠が見当たらず、青江自作詩だろうか。書体は少し角張り掠れて、これまでの書のような滑らかさが減じている。この特徴は、次の⑦の「雪景山水図」の題の書で、さらに強くなっている。最晩年の書風といえる。画は、画面左に峰を聳えさせ、前景の高樹の下に人物を配す青江の構成の定番ともいべきものである。高い峰に滝を懸けるのは、④⑤など後年の作に共通する。題詩の内容をすべてを盛り込むかのように、前景に文人の山居とその庭を広く表し、高い松の下、竹や白梅が植えられた庭では、童僕が3羽の丹頂鶴に餌を与え、それを書斎のなかから高士が眺めている。滝壺からの水流は屋敷の周りを巡り、開いた門の外には小舟が係留されている。この船着き場と右上方の遠景の江水の間は、岩間を走る溪流になっているが、江水とのつながりが不自然である。④と同様、いささか強引に入り組んだ景の構成を試みている。ただ、明るく白い絛本に透明感のある松の緑がさわやかで、小さく点じられた、梅の白や、丹頂や書斎の机の朱、岩や建物の代赭や藍などの彩りが鮮やかに映えている。一方、濃墨による主峰の卵石がやや過剰に施され、主峰の存在感を増すと同時に、画面を騒がしい印象にしている。これらの要素は、④や⑤などの作品との連続性を示している。本図は、晩年の青江が試みた複雑で力強い山水描写の集大成的作品といえるかもしれない。

⑦参考「雪景山水図」辛丑(1901)年 74歳 個人蔵

自題：萬樹千山一旦新、寒江凍合清無塵。

古之高人逸士、往々契筆作山水、以自娛。然多写雪景茲題、仮此以寄其嚴寒明潔之意耳。

辛丑盛夏日画七十四嫗 青江。

印章：「喬瑩私印」(白文方印)「青江」(朱文方印) ⑥と同印か。

この作品は、パトリシア・フィスター氏の著作に紹介<sup>29</sup>され、山盛論文の挿図に掲載されたもので、彩色図版も未見のため、参考作品として掲載する。題記の積文は、山盛論文の挿図から起こしたものである。題詩は中国詩に未見。自作の詩であろうか。

すでに述べたように、この題詩の書風は、⑥の題詩の書風の癖がさらに顕著になっており、青江の晩年の書風の特徴をこれらによって確認することができる。本図の款記で青江は「いにしえより高士逸士が自娛のために山水を描いてきたが、特に雪景を多く描き題を記すのは、それを借りて嚴寒のなかの明潔の意を託すためである」という。これは、中国の明の文人の雪景山水への思いを継承するもので、例えば、文徵明「関山積雪図卷」(国立故宮博物院(台北))の自題にも、古より雪景に儒教的な高潔な精神が託されてきたことを明記している。74歳の青江は、盛夏に、自娛のためにこの雪景山水を描いて、そこに文人としての気概を述べている。他にも、青江の雪景図としては、当館所蔵の小幅の「雪中山水図」の他、文人画研究会が2013年の古画観席で取り上げた「寒江独釣図」<sup>30</sup>の存在を知ることができた。ただ、それらはいずれも年記がないため、本稿では取り上げなかった。青江の雪景図については、今後の課題としたい。

## むすびにかえて

以上、管見に入った年記のある掛幅画によって、青江の画風を追ってみた。実見していない作品が多いため、仮の報告である。ただ、このように並べて見ると、やはり、墨と彩色のバランスや画法など、青江画に通底する特徴がつかめるように感じられた。また、50代から70代にかけての数例ではあったが、年代による画風と書法の変遷、晩年に向けて顕著になる複雑な構成への指向や、滝や卵石を好んで用いるなどの変化が確認できるように思う。今後は、岡田半江からの影響を確認することで、守旧的といわれる青江が、江戸時代の南画から何を受け継ぎ、どのような変化を見せたのかを確認し、青江画を時代のなかに位置づけたいと

考える。そのためには、半江作品とともに青江作品の調査を進めることが不可欠である。それによって、ここに備忘として記したものを修正しつつ、より確かな青江像を捉えたいと考えている。

(実践女子大学香雪記念資料館 館長 宮崎 法子)

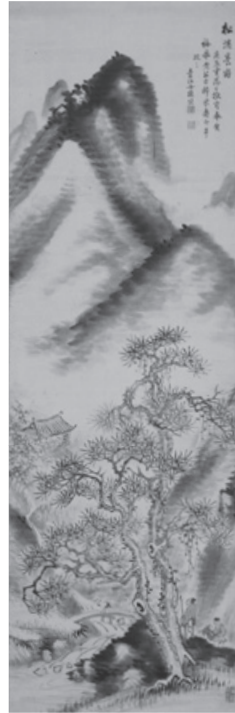
## 註

- 1 時代順に、①河邊青蘭「先師と門弟」『大毎美術月報』5、1923年(大正12)2月。②河邊青蘭「淋しく終わった青江女史の後半生」『大毎美術』第10巻、第4号、1931年(昭和6)4月。③河邊青蘭「青江女史の事」『大毎美術』28、1929年(昭和4年)4月。
- 2 山盛弥生「橋本青江「山水図」について」『実践女子学園香雪記念資料館報』7、2010年。
- 3 前掲注1②
- 4 同前
- 5 前掲注2
- 6 前掲注1②
- 7 『大日本人名辞書』講談社学術文庫版 1980年(昭和12年新訂第11版を底本にした1976年の講談社復刻版による)「ハシモトセイコウ」の條
- 8 本稿の初校後に、個人蔵の青江作品を数十点調査する機会を得た。また本稿③の「山水図」も展覧会で実見できた。それを通じて、本稿で把握した画風の変遷は大筋で有効であることが確認できた。その調査の成果については、稿を改めて論じたい。
- 9 前掲注1②
- 10 前掲注2 山盛論文、注15参照。その出品目録中の「大阪府 第二部 第一類」の項に大阪市東区瓦長一丁目の同住所で、橋本青江の着色風景人物、青蘊の着色山水が載る。
- 11 前掲注1②。また、博覧会と同年の庚寅(1890)年秋の年記にある青蘊の款がある絹本着色画「溪閣唫秋図」が、当館所蔵の『墨花研雨書画帖』中に見え、管見に入った目下唯一の青蘊款の作品である。今後さらに多くの情報が俟たれる。
- 12 石濱恒夫「評伝浪華人の雰囲気」『岡田米山人』文人画粹編 第15巻(中央公論社、1978年)。
- 13 前掲注1①河邊青蘭「先師と門弟」では、最初は五十年祭と記し、のち百年祭と記す。河邊青蘭が二十歳(1887年)頃のことというが、半江の生誕百年は1881年であり、没後50年は1895年となりいずれも合わない。祭祀の資金を得るため、青蘭が画の購入者を仲介したが、画の内容などについてあれこれ注文が出ると、青江が商売のために描くのではないと怒って、仲介した青蘭が大変まぜまい思いをしたと記す。青蘭が仲介できる年齢と考えると、やはり半江没後50年祭(青蘭27歳、半江68歳)のためと考えられる。
- 14 文俣は、文徵明の玄孫で父從簡も画家であったが、彼女が絵を残しているのは、嫁ぎ先(趙孟頫の子孫の家系という)の当主であった夫の兄の死後、その家が傾いた時期以後に集中しており、画によって家計を助けたと考えられている。Weidner, Marsha Smith, *Views from Jade Terrace: Chinese Women Artists from 1300-1912*. Indianapolis Museum of Art, 1988. 参照。
- 15 河邊青蘭「青江女史の事」『大毎美術』28、昭和4年(1929)4月。
- 16 古川文子「野崎家コレクションの中国書画にみる近代の交流」『文化共生学研究』第17号、岡山大学大学院社会文化研究科、2018年、7頁。古川氏は誰と特定していないが、青江の門人と野崎家の関係者が訪れたと言い、高市彩濱以外の人物について詳しく説明している。この高市彩濱を指して門弟と言ったと思われるが、根拠は未詳。
- 17 <https://news.ksb.co.jp/article/14444853?p=26380095> 2022年12月26日閲覧
- 18 前掲注16
- 19 前掲注1②
- 20 <https://aucview.aucfan.com/yahoo/x1039188771/> 2022年1月3日閲覧
- 21 『清河書画舫』巻27(文淵閣書庫全書本)。余復に文集は伝わらず、この燕文貴画の題詩によって知られている。「潯陽江上山如繡 挾策追遊憶往年 柿葉霜黃秋滿壑 芙蓉波冷月臨川 釣舟箇箇來沙曲 梵宇層層倚樹巔 白髮田園歸計晚 斷腸西望夕陽邊」(潯陽：陶潛の桃花源記にまつわる地の江上の山々は錦の刺繡のようであった、杖を携えて往年そこを旅したことを思い出す。柿の葉は霜にあたり黄色く色づき、山々に秋の気配が満ちている 蓮の花に寄せる波は冷たく、月が川を照らしている。釣り船がぼつぼつと入り江に浮かび、仏寺の屋根は重なり木々の頂上に見え隠れする。白髪になり田園に帰ることを思い、西の方夕陽のあたりを眺め心を痛める)。なお、この題詩の次に倪瓚が己酉(1369)年にこの燕文貴画を見た時の状況を詠んだ七言絶句が著録されており、その詩「野棠花落過清明 春事匆匆夢裏驚 倚棹幽吟沙際路 半江烟雨暮潮生」の結句が、岡田半江の号を思わせることが興味深い。これらから、江戸時代の文人たちが『清河書画舫』を詩文の情報源の一つとしていた可能性も推測される。
- 22 青蘭の箱書きは表「青江先生淡彩秋江垂釣図」、裏「先師青江先生画、墨情淋漓、筆致快暢、氣韻欲仙□、得天趣之妙、妾亦雖做其攀而不能。景慕之余書數言、青蘭河氏元」と読める。
- 23 <https://www.emosaka.com/museum/oosakajilyoseigaka/hasimotoseikou/sannsuizu/> (最終閲覧2023年1月5日)
- 24 『書画題跋記』『珊瑚網』、『石渠宝笈』、『式古堂書画彙考』などに著録される。①の余復の題詩といい、いずれも著録類に載る詩である。江戸から明治の頃、彼らが何に拠ってこれらの漢詩を知ったのか興味深く、今後調査を進めたい。
- 25 前掲注23に同じ
- 26 『劍南詩彙』巻26(文淵閣四庫全書本)では、楽を葉に、向を到に作るが、青江が書いている方がよい。
- 27 前掲注1③。
- 28 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A9%8B%E6%9C%AC%E9%9D%92%E6%B1%9F> (2023年1月5日閲覧)
- 29 パトリシア・フィスター「作品・解説篇23」『近世の女性画家たち』思文閣、1994年。
- 30 橋本青江「寒江独釣図」(文人画研究会) <http://dokugajuku.jp/2013-2.html> (2023年1月6日閲覧)





①1876年 49歳  
秋江垂釣図  
青蘭箱書有り  
紙本墨画着色  
145×41cm  
所蔵先不詳



②1880年 53歳  
松溪養鶴図  
統本墨画淡彩  
123.3×39.7cm  
実践女子大学  
香雪記念資料館蔵



③1890年 63歳  
山水図  
統本墨画淡彩  
138.0×42.6cm  
Eミュージアム  
大阪蔵



④1893年 66歳  
梅林春景図  
絹本着色 134.4×50.4cm  
Eミュージアム大阪蔵

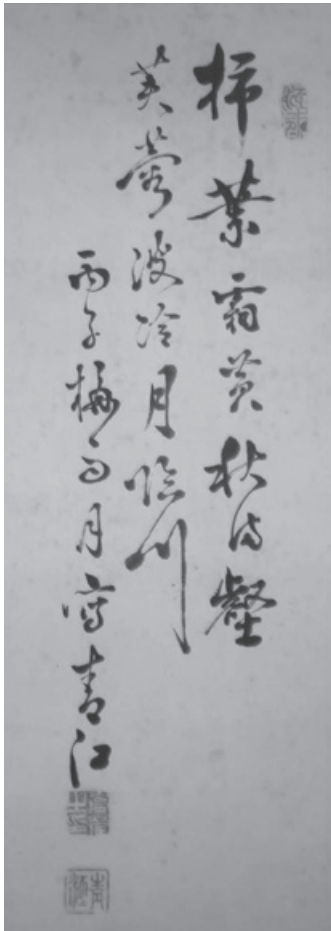


⑤1895年 68歳  
岡陵松福図  
Wikipedia掲載

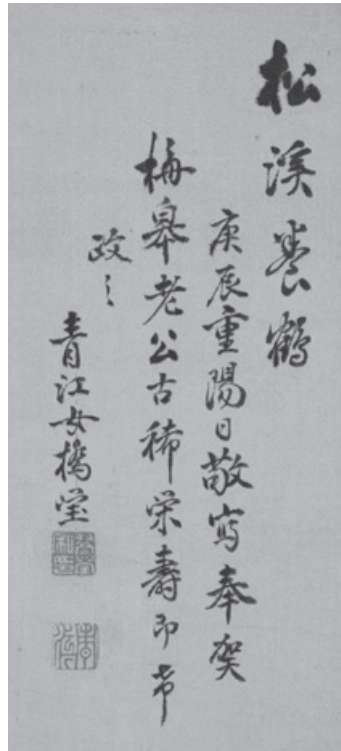


⑥1900年 73歳 山水図  
統本墨画着色 130.9×49.7cm  
実践女子大学  
香雪記念資料館蔵

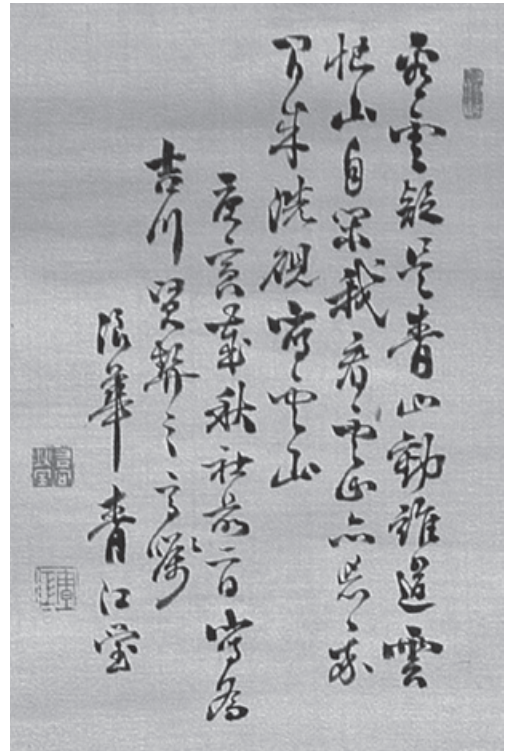
⑦1901年 74歳  
雪景山水図  
統本着色 136×50.8cm  
個人蔵



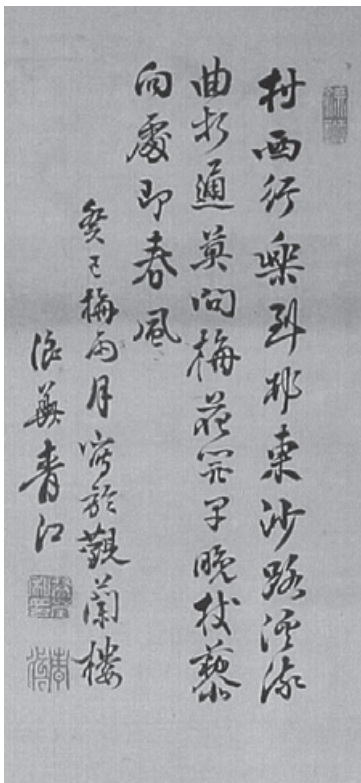
①題記 丙子1876年 49歲



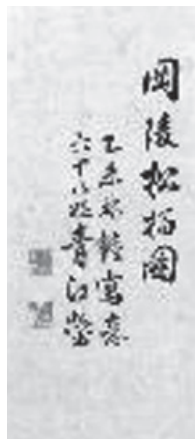
②題記 庚辰1880年 53歲



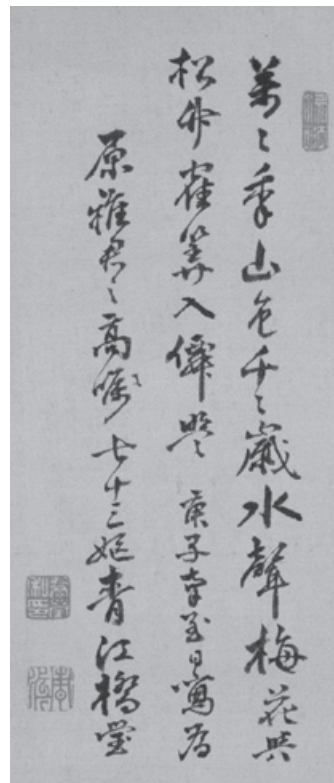
③題記 庚寅1890年 63歲



④題記 癸巳1893年 66歲



⑤題記 乙未1895年 68歲



⑥題記 庚子1900年 73歲

⑦題記 辛丑1901年 74歲